

論 文

教員志望学生の実習における学びの質的研究 — 体育的活動に関するテキストマイニング分析 —

A Qualitative Study on Student Teachers' Learning in Practical Training:
An Analysis of Their Perceptions on Physical Activity by Text Mining

常行 泰子 (高知大学教育学部)¹

長谷川 雅世 (高知大学教育学部)¹

TSUNEYUKI Yasuko¹

HASEGAWA Masayo¹

¹ *Faculty of Education, Kochi University*

ABSTRACT

This study qualitatively analyzed reports written by student teachers who were engaged in physical activity in practical training to support a small-sized elementary school. The research was conducted in October 2019 with students of the Faculty of Education at Kochi University in Japan who participated in practical training to support a local school. After analyzing their perceptions on physical activity by text mining, this research presented the following three as its main findings.

First of all, the students were strongly interested in the cooperative relationship among school, parents and local community, and their interest seemed to shift to having knowledge about school-related organizations and educational situations outside of school. Second, participation in physical activity helped the students deepen their understanding of the actual situation of school education and children. The third finding is that practical leadership ability and skills of the students were developed after observing how and what teachers did in physical activity at school. In order to develop sustainable education, teachers are required to cooperate with parents and local community. Therefore, it can be effective in practical training to make student teachers participate in physical activity.

I. はじめに

近年の Society5.0 に向けた議論において、教育はもとより、科学技術・学術、スポーツ、文化領域における政策と人材育成の重要性が増している。新しい時代に即した社会や教育の変化を捉え、ICT や先端技術、さらには AI 等を利活用するにあたり、①文章や情報を正確に読み書き対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力が共通して求められることが必要とされる（文部科学省, 2019）。従来の理論学習に加え、企業におけるインターンシップや教育・看護領域における実習、サービスマーケティング等の社会的活動といった学外における学習機会の増加と多様性が各高等教育機関において認められる。

人材育成を担う各高等教育機関においては、学生の「主体的な学び」を促す革新が求められ、地域や学校における実習やサービスマーケティング、ボランティア活動等が精力的に展開されつつある。特に社会的要請の高い教員及び教育の質向上が求められる教育改革の時代において、教員志望学生が授業や実習、課外活動を通じて学校を支援する役割担うようになってきた。廣澤ら（2018）は、学校全体のエンパワーメントを補うために、非専門家（大学生）が授業と通じて行う学校支援ボランティアの役割を質的に分析した。その結果、学校との連携や広報支援によるプレイヤーとしての役割や、生徒の主体的を引き出す匿名性の関係、対象児や教師との仲介的存在、学校全体のエンパワーメントの位置づけとして大学生の支援活動を示唆している。

学校支援において授業時や終了後の学習支援は極めてニーズが高いが、それ以外にも「学校現場のニーズに沿った活動」の重要性が指摘されている（酒井ら, 2016）。特に少子化と過疎化が急速に進行する地方の小規模校においては、教員の負担が高い学校行事として運動会や体育祭等があり、用具運搬や複数名で行う共同作業等、身体活動量の高い体育的活動の支援要請の高さが推察される。体育的活動とは、体育科の学習時間以外の、体力の向上及び心身の健康の保持増進に関する活動とされ、①対象学年・内容・形態・時間・場所・期間などを、学校の実態や特色、活動のねらいに応じて多様に設定することができる、②自分なりの方法で、自由に気軽に取り組むことができる、③運動遊びと結びつけやすく、運動の日常化につなげることができ、運動遊びやリレー、リズムダンス等が含まれている（東京都小学校体育研究会, 2015）。本研究では、運動会やプール等の体育に関連する行事等に備えた準備活動も身体活動量が比較的高いことから、広義の意味で体育的活動に含まれるものと仮定した。

よって本研究では、地方の小規模校を支援する体育的活動を通じた実習に着目して、学生の学びを洞察することを試みた。体育的活動の教育効果について質的に検証した知

見は管見の限り見当たらず、学術的意義が高いものと考えられる。教員を志望する学生の学びに関するレポートを分析し、体育的活動を行うことに伴う学習効果を明らかにする。本研究の目的は、教員志望学生を対象として、学校支援の実習における体育的活動に関する記述レポートを質的に検証することである。

II. 支援実習の概要

支援実習は、高知大学教育学部において教育の実践的側面を学習する授業科目として 2010 年度に通年科目（集中）として開設され、2011 年度から 2019 年度まで開講されている。以下に、概要を記す。

【授業科目の主題】

県内学校の実践と継続的にかかわり、指導者や地域の人々とともに問題解決の方法を探ることをとおして、教育に必要なコミュニケーション能力と学校教育の課題を克服する実践的指導力を高める。

【履修資格】

教育学概論を履修済であること。原則として、プロジェクト（授業計画等を参照）の全ての授業日に出席できること。

【科目キーワード】

実践的指導力、課題解決、教育コミュニケーション、省察

【授業科目の到達目標】

1. 子どもたちや教職員、保護者と積極的にコミュニケーションを図ることができる。
2. 自ら進んで学校行事支援を行い、それを省察することができる。

【授業計画】

1. オリエンテーション（授業の目的・計画説明、実習校・班等の決定）
2. 各実習校での実習
3. 活動ごとに「まなびフォーリオ」形式のレポートを提出する。全活動終了後に最終レポートを提出する。

本研究では、各実習校プロジェクトのうち、高知県吾川郡仁淀川町に所在する A 公立小学校の体育的活動の支援（運動会準備支援、プール洗い支援）に着目した。A 小学校におけるプロジェクトは、2019 年 4 月～2020 年 2 月までの 11 か月間のうち、オプションを含めて現場実習 7 回、大学における準備・振り返り・発表等が 9 回予定された。

【成績評価】

実習前後に記入する「学びフォーリオ」と最終レポートによって評価する。

III. 研究方法

1. 調査対象・期間

2019年10月、高知大学教育学部2年生のうち支援実習を履修する大学生12名(男子7名、女子5名)を対象に調査を実施した。本研究の対象となった支援実習は、高知県A公立小学校における、①運動会準備支援(2019年9月27日)、②プール洗い支援(2019年5月21日)であった。これらの体育的活動に関する学生の記述レポート12票を分析の対象とした。

2. 調査方法・内容

学生を対象に課題を設定し、記述内容の計量テキストを分析した。「学校行事を支援する立場から学んだことや気づいた点等について、具体的な場面や状況を踏まえて、自由に記述してください」とし、「ヒト(教員、子ども、保護者、大学生、地域住民など)、モノ(環境、施設、設備、用具など)、カネ(資金、予算など)、情報(地域、他の市町村、インターネット上など)など様々な切り口があります。小学校や地域(高知県吾川郡仁淀川町)のホームページなどを確認し、多様な視点で記述してください」と明記した上で、各500字程度記入させ、提出させた。

3. 分析方法

データは、テキストマイニングの手法によりKH-Coder(樋口, 2014)を利用した。KH-Coderは、教育以外にも医療・看護、社会学等の計量テキスト分析において、樋口(2011)、阪口ら(2015)を始め、社会科学・心理領域を中心に研究が蓄積されつつある。本研究では、分析の前段階として抽出語リストを作成し、自動抽出した抽出語の内容を確認した。「保護」のみの抽出語が示されたため、「保護者」として強制抽出の設定を行い、抽出語の上位リストを作成した。また、抽出語間の共起関係を明らかにするため、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークは、文書と単語を抽出した関連性や特徴ある共起関係を図で表記したものである。描画条件は、出現数2以上の単語・文章、描画数60に設定した。

IV. 結果と考察

1. 運動会準備支援に関するテキストマイニング分析

はじめに、記述内容についてテキストマイニングを用いて分析を行い、抽出語と出現回数について表1に示した。運動会準備に関する記述は5845字であった。出現回数が多かった順に、「準備」(48回)、「学校」(47回)、「地域」(43回)、「運動会」(40回)、「保護者」(40回)、「方々」(25回)、「教員」(22回)、「小学校」(21回)、「考える」(17回)、「行う」(17回)が挙げられた。また、図1に運動会準備に関する共起ネットワークを示した。「準備」「学校」「保護者」「運動会」「地域」が最も大きな島を形成し、これらの変数が相互に関連して状況が明らかになった。保護者・地域・学校の連携に関して強い接点が見られ、学生における気づきの視点が、学内に留まらず、学外の組織や

環境へと移行している状況が明らかになった。望月(2014)は、勉強補助や印刷等の支援活動における教育学部生の活動記録を質的に分析し、「同僚・家庭・地域との連携」に該当する記述量の平均とその割合について1年次(11.8%)と2年次(11.0%)を示している。本研究では、地域(43件)、保護者(40件)の抽出語が上位ランクに位置し、小規模校における運動会準備が、いかに家庭や地域と密接に連携しているかについて学んだ学生の状況が端的に示された。

次に、「小学校」「子ども」「来る」といったグループが「地域」と接点を持っていた。「考える」「繋がり」は「学校」と関連しており、「出来る」「段階」「対応」も学校との繋がりにおいて関連性が認められた。別の島には、「児童」「大学生」の繋がりが見られた。「行事」と接点がある変数は「参加」「積極」「関わる」といった意欲や態度に係る文言が記述されている状況が示唆された。

表1 運動会準備支援における抽出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
準備	48	強い	9	参加	5
学校	47	先生	9	重要	5
地域	43	大学生	9	小規模	5
運動会	40	繋がり	8	前日	5
保護者	40	人	8	中止	5
方々	25	別府	8	保育	5
教員	22	連携	8	たくさん	4
小学校	21	関わり	6	一緒	4
考える	17	関係	6	活動	4
行う	17	教師	6	行動	4
自動	17	今回	6	姿	4
見る	16	支持	6	持つ	4
思う	16	自分	6	手伝う	4
協力	14	出来る	6	終わる	4
感じる	13	進める	6	場面	4
行事	13	円滑	5	多く	4
子ども	11	驚く	5	大切	4
来る	11	言う	5	必要	4
テント	10	交流	5	良い	4
多い	10	作る	5		
学ぶ	9	作業	5		

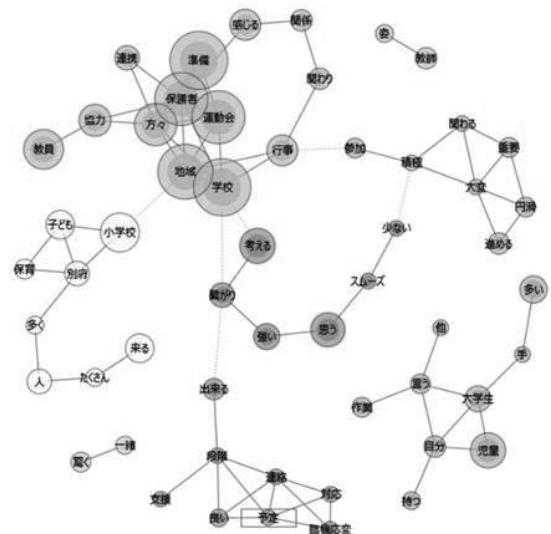


図1 運動会準備支援に関する共起ネットワーク

1. プール洗い支援に関するテキストマイニング分析

抽出語と出現回数について表 2 に示した。プール準備に関する記述は 5210 字であった。出現回数が多かった準備に、「児童」(39 回)、「プール」(27 回)、「考える」(20 回)、「子ども」(20 回)、「掃除」(20 回)、「子」(18 回)、「自分」(17 回)、「感じる」(16 回)、「活動」(15 回)、「思う」(15 回) が示された。また、図 2 にプール準備に関する共起ネットワークを示した。「プール」「子ども」「自分」「考える」「思う」といったグループが最も大きな島を形成し、「先生」「清掃」「感じる」「理解」へと相互に関連している状況が明らかになった。児童とコミュニケーションをとりながらプール清掃を行うことにより、体育的活動や授業準備が必要となる教育現場と子ども理解が深化し、教員の仕事内容を肌身で実感している状況が示唆された。「掃除」「見る」と、「活動」「協力」は、それぞれ別の島を形成していた。さらに、「注意」は、「褒める」「方法」と繋がり、「成長」については「改めて」「一緒」「学年」「高学年」と関連性がみられた。また、「教師」「指示」は「清掃」と接点を持ち、「多い」「話す」「声」の島も形成された。支援実習に求められる教育のコミュニケーションは、子ども(児童)自体の理解だけでなく、教員(教師)の指示や実践的指導の場で変容する子どもへの理解を促進させた点が明らかになった。

表 2 プール洗い支援における抽出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
児童	39	必要	7	多く	4
プール	27	道具	6	応える	4
考える	20	理解	6	部分	4
子ども	20	学校	5	話	4
掃除	20	学年	5	違う	3
子	18	教員	5	会話	3
自分	17	言う	5	改めて	3
感じる	16	仕事	5	頑張る	3
活動	15	支援	5	給食	3
思う	15	持つ	5	教育	3
先生	14	終わる	5	興味	3
洗い	12	集中	5	今後	3
注意	10	場所	5	資金	3
見る	10	多い	5	出す	3
清掃	10	大学生	5	振り返る	3
協力	9	聞く	5	成長	3
教師	9	パケツ	4	前	3
行う	9	一緒	4	全員	3
学ぶ	8	関わる	4	全体	3
担当	8	高学年	4	促す	3
褒める	8	作業	4	大切	3
行動	7	時間	4	着目	3
使う	7	実際	4	分担	3
指示	7	小学校	4	方法	3
授業	7	声	4	役割	3
水	7	早い	4	力	3
				話す	3

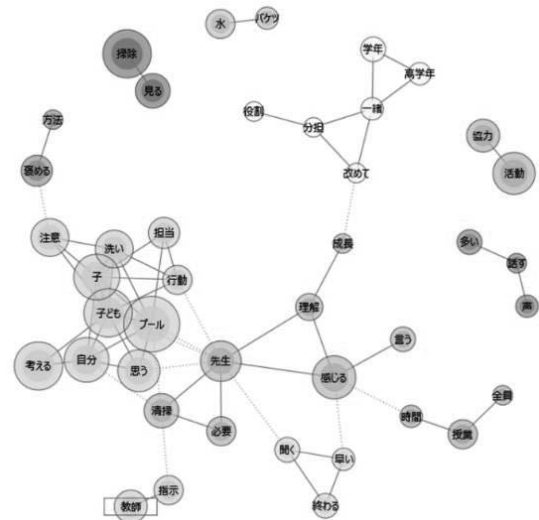


図 2 プール洗い支援に関する共起ネットワーク

2. 体育的活動と学びに関する記述例

レポートにおける記述例から、「考える」「感じる」「行う」「見る」「学ぶ」「褒める」等の動詞テキストが多数抽出され、学生と児童における双方向型の協働学習や教員になった際に必要とされる実践的指導力に関する詳述が示された。(下線は筆者)

“もちろん安全面も考えながら、児童が一人のできる部分は児童自身に行わせることも重要な教育の働きかけなのだと再確認した。全てを支援するだけでは成長には繋がらないので、関わり方について改めて考えたいと思う”

“確かに大学生だけでやればもっと早く終わっていたかもしれない。しかし、私たち大学生は裏方であり児童が主体的になるべきであることを思い出すことができました。それに、運動会(準備も含む)は児童の自己肯定感をより高める良い機会だ。児童たちの中で「自分たちが準備して運動会するぞ」という気持ちができたのなら私たち大学生としても良かったと思う”

“私が教師になったときはもちろん若手なので率先して準備に関わり献身性を持つことが大切だと思えた。そして先輩方の行動・姿勢を学びながら成長していきたいと思う”

“プール洗いに向かう前の注意事項や担当割り振りの際は、なかなか集中して話を聞くことができなかつたり、プール洗いの前に並ぶのに先生に何回も注意されていたりするところを見て・・・しかしプール洗いが始まると、子どもたちは率先して動き、予定時間よりも早く終わらせることができました。・・・たぶん子どもたちはプールで泳ぐのが楽しみで、そのための掃除だから長時間でも頑張れたの

だと思ふ。授業においても、児童が意欲的に学べるように興味を持たせることが1番大切だと思つた”

学校教育の現場において、体育的活動は一番に安全性が優先される。学生・児童双方が活発な身体活動を伴う体育的活動を実施することで、児童との距離感や教育におけるコミュニケーション、実践的な指導や対応方法について省察を行う学生の記述が多くみられた。本実習では、小学校教員の配慮で、運動会準備以外にもリレー種目のリハーサルを行い、学校での体育的活動に関する実践も学生は体験した。リレーという体育的活動を準備と合わせて体験した経験は、学生の実践的指導力に多大な影響を及ぼしたものと推察される。

地方の小規模校における教育現場への理解を深め、学外の環境・組織へと学びの視点が変化している状況は、共起ネットワークの結果とも一致している。湯口ら(2013)は、「教育実習では『子ども』をアジェンダとすることで『場』は生まれやすい。しかし、『場』が生まれただけでは学びはすすまない。『場』が育っていかなければ、社会的な学びも進んでいかないのである」と分析している。支援実習の場は、それ自体子ども理解を深める学習機会となり得るが、教員としての役割を学習する上で、教育におけるコミュニケーションや指導力養成の重要性が改めて確認されたと言えよう。すなわち学校現場における実践的指導力については、教員志望学生の教育への取組みについて強い影響を及ぼした点がレポート記述例から推察された。

また、学生においては、児童の姿が学校「内」の視点から、学校「外」の視点へとシフトしている様子が明示された。この点については、共起ネットワークの結果とも一致しており、地域・家庭と学校の連携について実践的に学習し、理解を深めた状況が示唆される。

“学校側からの保護者への働きかけ、普段からの関わりがあり、信頼関係が成り立っているからこそ毎年来てくれる方がおり、教員だけの指示でなく保護者が動くことができるのだと感じた。小規模の学校だからこそ、より地域や保護者の方々の協力、学校との連携を強固におこなっていかなければ、必ず成功する(子供たちの心に残る)運動会にはならないと感じた”

“自分が考えていた以上に地域の方々が集まっている印象を持った。授業後にまず児童が校庭に準備をしに出てきて、そこから少しずつ保護者と見られる方々やそれ以外の町内の方々が集まってきていた。大人がわざわざ学校に集まり、子どもと一緒に翌日の用意をするという光景はあまり見たことがなかったため驚いた。これまで以上にはっきりと「地域と学校との繋がり」を見ることが出来た。これが

高知駅周辺の小学校だったらどうなのだろうか・・・地域の小学校を特別な場所とすることで、その地域の中での繋がりが出来る、または強化される。このような形が「地域と学校の繋がり」の理想的なものではないかと考える。教師として子供と向き合う時、見なければいけないのは子どもの「学校での姿」はもちろん、「学校外での姿」もそうであるだろう。地域と学校の繋がりが強いと、後者の「姿」もよく見えるのではないだろうか”

支援実習の体育的活動を通して、これまでの学習経験で得た知識以外にも、児童との活動や関わり場面において「子ども理解」が促進されつつある状況が詳述された。池田(2014)は、幼稚園児の体力・運動能力測定や運動会の練習支援が学生教育に有益であったと同時に、保護者や地域への貢献につながった双方向モデルの有効性を示唆している。安全面の配慮や子どもを取り巻く状況判断等は、観察実習では機会が少ないため、コミュニケーションや実践的指導力を始めとする人材育成において必要不可欠なものとなる。本研究の分析対象は、運動会準備やプール洗いの支援であり、教育現場の雑務等を支援する他の実習と同次元で議論することはできない。しかしながら、体育的活動の学びにおいて、深い気づきと理論学習に基づく洞察を学生が主体的に行った点については教育効果が極めて高い授業内容が展開されたと推察される。

V. まとめ

本研究では、教員志望学生を対象として、小規模校における体育的活動に関する支援実習の記述レポートを質的に検証することを目的とした。高知大学教育学部に在籍する支援実習の履修学生12名の記述レポートをテキストマイニングにより分析した結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 保護者・地域・学校の連携に関して強い接点が示され、学外の組織や環境へ学生の興味・関心が移行している状況が明らかになった。
- 2) 体育的活動に関する学びを通して、教育現場や子どもへの理解が深化している状況が示された。
- 3) 学校教員の体育的活動に関する対応を学ぶことで、実践的指導力が向上したと考えられる。

持続可能な教育の取組みにおいて、学校現場を取り巻く地域社会や家庭との連携は必要不可欠となる。支援実習における体育的活動は学生教育において有用であり、学校内外の視点から教育を捉える貴重な機会であったと考えられる。

謝辞

本研究と実習を進めるにあたり小学校関係者の皆様と

保護者・地域住民の皆様に多大なご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

鳴門教育大学研究紀要 鳴門教育大学編, 28, pp.392-399.

引用・参考論文

高知大学教育学部シラバス (2019) .

https://kulas.jimu.kochi-u.ac.jp/portal/Public/Syllabus/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2019&lct_cd=41416 (2019年11月27日閲覧) .

酒井研作・溝部ちづ子・石井眞治/・斉藤正信・財津伸子・道法亜梨沙・谷川宮次 (2016) 小学校における「大学生による学校支援ボランティア」の効果的活動に関する研究. 比治山大学紀要, 23, pp133-143.

文部科学省 (2019) Society5.0に向けた教育の在り方とは. http://www.mext.go.jp/b_menu/saiyou/sougoujimu/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/01/1382361_01.pdf (2019年11月26日) .

樋口耕一 (2011) 現代社会における全国紙の内容分析の有効性—社会意識の探究はどこまで可能か. 行動計量学, 38(1), pp.1-12.

樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.

廣澤愛子・大西将史・笹原未来・栗原知子・松本健一 (2018) 非専門家 (大学生) による学校支援ボランティアが果たす役割—教師への質問紙調査の質的分析. 臨床心理学, 18(6), pp.743-753.

池田孝博 (2014) 保育現場との連携活動による保育者養成の実践的教育と地域貢献—身体活動に関する指導および支援活動を通して—. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 23(1), pp.1-12.

望月耕太 (2014) 学校支援活動が教育学部生の教師としての職務内容を役割に関する理解の深まりにもたらす効果の検証. 教科開発学論集, 2, pp.23-30.

大木えりか (2018) 地域実習におけるフィールドスタディの意義—実習生のリフレクションを促すグループインタビューの質的データ分析—. 地域創生学研究, 1, pp.121-131.

阪口祐介・樋口耕一 (2015) 震災後の高校生を脱原発へと向かわせるもの—自由回答データの計量テキスト分析から. 友枝敏雄編 リスク社会を生きる若者たち—高校生の意識調査から. 大阪大学出版会, pp.186-203.

東京都小学校体育研究会体育的活動領域部会 (2015) . <http://www3.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1350006&frame=frm553d84c86f3bf> (2019年11月28日閲覧) .

湯口雅史・西村公孝・佐藤公子 (2013) 教育実習における「社会的な学び」の可能性を見出す試論: 「場」の萌芽と創発を結ぶ大学と実習校との連携への期待から.